

日本の最北端、北海道稚内で 日口友好のかけはしに

稚内日口経済交流協会

あつの
熨野典子

さん

創価大学 文学部外国語学科
ロシア語専攻卒業

「国際交流を通して地域に貢献したい」
創価大学では学生のニーズに応え、
欧米・アジア・アフリカなど
世界44カ国・地域の1001大学と交流。
交換・推薦留学など、
多彩な留学制度が充実しています。

日本の最北端に位置する北海道稚内市。『日本のてっぺん』宗谷岬からわずか四十三キロ先、国際フェリーで五時間半の距離には、ロシア連邦サハリン州がある。稚内は、もともと水産物を中心にしたロシアとの交易が盛んな街として知られているが、近年は、サハリン島周辺で進行中の石油・天然ガス開発（サハリンプロジェクト）のための建設資材や機器類の輸出拠点としても話題にのぼってきている。

創価大学外国語学部でロシア語を専攻した熨野さんが活躍するのは、そんな稚内と主にサハリンとの交流をサポートする稚内日口経済交流協会。

「協会は、サハリンプロジェクトのための輸出の手続きを手伝ったり、交流事業を行ったり、サハリンと稚内との橋渡しの仕事をしています。私は、おもに輸出機器の解説書や契約書の翻訳などを行っています。ときには、病気になったロシアの人を病院に連れていったり、法廷通訳など様々です」

稚内で生まれ育った熨野さん



が、はじめてロシア語と出合ったのは中学時代のことだ。市内にロシア専門の店ができ、その看板のロシア語の文字が不思議で、なんと読むのだろうと興味をもった。日本人は入れない店

モスクワ大学のサドーフニチイ総長を囲んで創価大から留学した仲間たちと(左から3人目)



日本最北端の地の碑
晴れた日にはサハリンの家々も見える

を買い込み、見知らぬ言葉で話すロシアの人たち。「言葉を交わしてみたい」サハリンは稚内から一番近いヨーロッパだ。

ロシア語を学びたいと思った熨野さんは、高校卒業後、東京で朝日新聞の奨学生となった。朝夕の配達をするかたわら受験勉強をして、二年後に創価大学に入学。毎日午前三時に起きての新聞配達とクラブ活動と勉強

は、大学二年までつづいた。「創価大の学生って、けっこう苦労を苦労と思わない学生が多いんです。だから、そのときは、私のしていることも特別とは思いませんでした」

留学生試験に合格。翌年、三年生のときに一〇か月間の留学を経験した。「留学中、なかなかロシア語の勉強が進まず悩んでいたとき、創立者池田先生から贈っていた本に、『学は宝なり』というメッセージが。その言葉を励みに留学をのりきることができました。帰国まぎわに、サドーフニチイ総長が創価大学の留学生と懇談会を開いてくださったことも忘れられない思い出です。昨年夏に日本漁船がロシアに拿捕された事件には胸が痛みました。交通の便などが進み、やはり人と人との交流がもつと盛んになることが大切です。ロシアと日本の交流のため、そして地域の発展のため、法律に関する力もつけていきたい」

横田稚内市長は、「国際交流特区の認定を受け、『日口友好最先端都市わっかない』をキャッチフレーズに、その機能をますます充実させていきたい」と熱く語る。熨野さんの活躍の場も、これからますます広がっていくにちがいない。

Noriko Asuno

あつの・のりこ/昭和五三年北海道稚内生まれ。平成九年稚内高校卒業。平成十一年創価大学文学部外国語学科ロシア語専攻に入学。平成十三年ロシア・モスクワ大学に留学。平成十五年創価大学卒業。現在、稚内日口経済交流協会に勤務。

